

ホトトギス

十月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十一日発刊
創刊二十五年十一月一日発行
創刊以来第二十五巻第十号



風雅の小筥（五十六）

廣太郎

先月丸ビル五五三区にホトトギス社の事務所が移転した時の事まで書いたが、平成三年一月十四日から此処での営業が始まる。当時のホトトギスを繙いてみると、先ず平成三年一月号（一一二九号）で「社告」として掲載されている文面が「移転します」という予告文であり、次の二月号である（一二三〇号）では「移転しました」という文面で同じく掲載されている。一月号は未だ七五三区の時、二月号は五五三区の時の発行となり、当時の仕事の流れを何となく思い出した。

こうして又ホトトギス社は同じビル内であったが、新しい歴史を刻む、というのは大袈裟かも知れないが、ここから又新しい一步を踏み出したと言っても良いだろう。

その後滞りなくホトトギス社での仕事は変わらず続けていたのであるが、何と言ってもその後の大きな出来事は、平成七年一月十七日に勃発した阪神・淡路大震災であった。当時の汀子の写生文等にも書いてある通り、阪神間の被害は甚大であった。私自身は東京に居て直接被災する事は無かったが、関西にお住いのホトトギス同人で犠牲になられた方も居られ、私の関西の個人的な知人、友人もかなり多くの方が被災されたのであった。汀子宅は、幸い全壊という事もなく、建物としての被害は軽微であったが、やはりライフラインは暫く寸断されており、生活に不自由する日々が続いたのであった。この大震災の影響は、被災地だけではなく、この丸ビルにも及ぶ事になるとは、当時は想像もしなかったのである。

廣太郎句帳 廣太郎

令和三年十月二日 菅屋ホトギス会

みよし野の桜紅葉といふ矜持
ばつた飛ぶ芝の起伏を知り尽し
新米に箸喜んでをりにけり

十月三日 野分会菅屋例会

囿てふ運命を知らず籠の鳥
朝光に色を放ちて囿籠
囿籠吊るより変りゆく山気
婚姻は二人の秘跡胡桃割る

十月三日 青嵐会菅屋例会

白壁に來て秋風の色変る
いぼむしり壁となりたる佳人の手

十月六日 NHK文化センター

初鴨や水凹ませてへこませて
秋の声聞くより旅の一步かな
秋風にビル街の午後動き初む

十月七日 蕉心会

曇天の端より秋声降りてくる
屋の虫日差を恋うてある音色
身に入むやけりをつけねばならぬこと
松手入されて表情変はる園
萩散りや万華鏡めく水面かな
水澄むや水上パスの音軽し
秋灯下悪筆極む吾の色紙

十月十三日 土筆会

零余子蔓引けば深まる山気かな
都心てふ彩りに冬近きこと
新走横川に忌日重ねつつ
一ト雨に一ト雨に冬近づける

不自由な生活解かれて新酒酌む
地震ありてより冬近き都心かな

十月十四日 西の虚子忌

峰寺へ露の歩幅を重ねつつ
西虚子忌母の不参を詫びもして
虚子塔の辺りもつとも秋の声

十月十五日 空地文芸選者吟

こども又空地となりて冬近し
十月十五日 廣邦会

虚子塔の燭秋風に躍りけり
出港の銅鐸金風を歪ませて
米俵酒樽並べ秋祭

十月十八日 朝日カルチャー若草句会

朝寒に靴音高きアスファルト
横川の忌薄紅葉てふ気品かな
新蕎麦を打てば降り来る山の精
昨日とは違ふ都心の身に入みて
鶉の声より明け初むる都心かな
再会といふ秋灯の明るさに

十月十九日 若水句会

光圀を偲ぶ名園露寒し
初鴨や人との距離を保ちつつ
鳥語降る中に秋声確とあり
雨上るより薄紅葉てふ主張
曇天に楚々と色置く石路の花
三羽てふ初鴨の陣組まれゆく

十月二十一日 前議員句会

官邸の主の変わって冬近し
議事堂の窓を掠めて小鳥来る
再開の句座爽やかに揃ひけり
金柑や築百年の庭の黙

十月三十一日 登高会

金柑のたわわに主病んでをり
田の神を山に還して秋惜む
むくの群伸び縮みして空を掃く
秋惜む記憶の薄れゆく君と

十月二十四日 青嵐会東京例会選者吟

初紅葉庭園の黙解きゆく
薄紅葉ドームの屋根を借景に
再会の叶はざる人そぞろ寒
掠鳥の空袈裟懸けにして消ゆる
鎌倉の忌日遠ざけ秋惜む

十月二十四日 野分会東京例会

胡桃割る寡黙な母と対峙して
囿籠吊るより山の神親し
大空を恋うて囿の孤高かな
終日胡桃転がす掌

十月二十七日 目黒学園句会

魂の叫びを空に鶉の賛
天高し人工の星その中に
鶉高音都心の朝を引き締めて
身に入みて喉を潤す赤ワイ
教会の葬儀身に入む祈りかな
十月二十八日 カトリック新聞選者吟

十月二十九日 不動の庭で遊ぶ会

会話ふと途切れる時の添水かな
木の実踏み昔の音を聞いてをり
魯田を房総の風裏返す
紅葉且散る子等の声弾きつつ
水澄みて水車の音も澄みゆけり
十月三十一日 伝統俳句協会関東支部大行モト出席
木の実落つ切株に音響かせて
ビル街を包み込みたる秋の声
やや寒の靴音響くアスファルト

雑詠 廣太郎 選

師の気配あるらし花の蔵王堂 加須 岡安紀元
 面影を追ひつつ花の吉野へと 同
 花を愛で師の追憶の旅終る 同
 蝶高く飛べばはかなきものならず 鹿兒島 上迫和海
 天空は横へも無限樟若葉 同
 野に熟れしもの食み新茶甘きかな 同
 父逝きし春愁の闇ひたひたと 横浜 高浜礼子
 春愁や父の書齋の黙深し 同
 掛軸の父の字清し春惜む 同
 殉教史播く碑文冴返る 島根 猪俣北洞
 日本に虚子大空に花万朶 同
 虚子忌てふ宇宙よりなほ重きこと 同
 飛火野へ行くと別れて若葉道 大阪 酒井湧水
 平城の楓若葉に休む車夫 同
 今日何もかも新緑に悼みけり 同
 草笛や能楽堂のあたりより 神戸 和田華凜
 文末にかしこと書きて花あやめ 同
 花入に有馬籠もて風炉点前 同

春の闇へと深入りをしてみたく 大宰府 持永真理子
 葱坊主帰郷してよりただの人 同
 先住の犬に甘ゆる子猫かな 同
 新豆腐うすももいろの塩すこし 東京 今井肖子
 交叉する鯉の曲線水澄める 同
 浮くはずの無きもの浮かべ秋出水 同
 静心もて粽解く指の先 西宮 本郷桂子
 一本の紐と化したる粽解く 同
 香の立ちて日の斑風の斑若葉の斑 同
 降臨の杜降誕の鹿の子守る 奈良 古賀しぐれ
 神代より神と仰がれ樟涼し 同
 天を衝く千年杉の秀の涼し 同
 全身を風すべり落つ籐寝椅子 龍ヶ崎 今橋眞理子
 一花また一花鉄線風に咲く 同
 一枚の窓染め上げて薔薇の雨 同
 梅椿虚子恋ふやうに汀子恋ふ 相模原 木村享史
 汀子恋ひつつの虚子忌を老一人 同
 師を亡くし腑抜けし春も逝かむとす 同
 青空と新緑うつす朝の湖 東京 川口利夫
 遠き日のふるさと恋し麦の秋 同
 一色の丘の起伏やラベンダー 同
 新茶汲む良きことひとつ思ひつき 神戸 山田佳乃
 更衣して似たやうな服ばかり 同
 解きやすきやうに結びて笹粽 同

雑詠句評（九月号より）

虚子像と汀子の遺影夏に入る 東京 今井千鶴子

汀子先生は二月、虚子忌は四月、今年の春はひときわの思いの日々だったが、それでも月日はめぐり「夏に入る」頃となった。お二人のことを深く偲びつつ、新たに夏に向かつて生きていかなばならぬという作者のしみじみとした思いが伝わってくる一句。

この二人の故人にはとりわけ御縁の深かった作者。故人を思いつつ、自分の日々を丁寧に生きる覚悟のようなものが見える句である。（中正）

虚子のかの「子規逝くや」の句を彷彿させられる句である。御存知の通り直接虚子の指導を受けた作者は二人とも御存知で、汀子が逝去して一人遺された悲しみをひしひしと感じておられるのである。淡々とした表現が見事である。（廣太郎）

上梓の日待たれず永久の春眠に 相模原 木村享史

心地よい眠りの象徴である春眠。しかし閉じられたその瞼が再

び開くことはもうないのだ、という哀しみをはらみながらも、春眠という季節の持つ明るさは安らかさに通じてゆく。永久の春眠、という言葉にこめられた作者の万感の思いを、読み手は皆感じるに違いない。（肖子）

本人は完成を待たずに逝ったが『稲畑汀子俳句集成』の編集に深く関わって下さった作者である。結局遺句集になってしまった悲しみも感じられるが「永久の春眠」と表現したところに何か救いのような気持を感じる。（廣太郎）

全山の花に抱かれ汀子句碑 西宮 田中祥子

「全山の花」とは言うまでもなく吉野山の桜。汀子先生が吉野を訪ねられるようになったのも、一山の花柱のことを聞かれ、ご覧になりたい一心から毎年の花の旅となったと聞いている。

その思いを詠まれた「一山の花の散り込む谷と聞く」の先生の句碑が吉野元湯の常宿の庭に建立されている。作者も吉野に着くやいなや、一番に先生の句碑のある宿を訪ね、先生を偲べれたのだ。吉野の桜は通常は下千本から始まって中千本上千本と順番に咲き上って行くのだが、今年は吉野全山の桜が同時に咲いたのだ。全山の花が先生を偲び「汀子句碑」を包んでいるかのように作者には思えたのだらう。（むつみ）

毎年汀子をはじめ、桜の時期楽しみに訪れていた奈良県吉野山

の定宿の庭に建立されている汀子句碑である。残念ながらコロナ禍でここ数年行けなかったが、句碑は毎年花を、これからも永遠に見続けるのである。(廣太郎)

うつしゑの汀子麗し花館 奈良 古賀しづれ

「花館」とは、作者が弔問に訪れた汀子邸であろう。折しも花の候、屋敷は花につつまれ、いつもなら華やかにお迎えくださる主の汀子師の姿はなく、ただただ美しい「うつしゑ」があるばかり。その対比が深い悲しみを静かに伝える。

「ホトトギス」五月号の扉の写真、「ありし日の汀子先生」の今にも語りかけてくれそうな笑顔に思わず涙したが、ここで詠まれているのもあの写真ではないだろうか。先生は、ほんとうに美しかった。見目形だけではなく心ばえも美しく魅力的で、気品に溢れていた。「汀子麗し」にそのすべてが凝縮されている。(眞理子)

汀子の写真が飾つてある館という事で、汀子邸の応接間も想像出来る。庭には淡墨桜が満開であったのではないだろうか。作者も汀子に直接指導を受けた作家である。写真でしか会う事の出来ない故人を偲ぶ心が読み取れる。(廣太郎)

亀鳴き止まずレクイエム鳴り止まず 神戸 山西商平

一読するとこの御句は七五五の破調になっている。「亀鳴き止まず」と調べよく春になった感覚を歌い出す。春になると実際は鳴かない亀が、雌亀を求めて鳴くと言われているように空想の春の世界へと読者を導いていき感覚的な春らしい陽気にさせて行く。

次に「レクイエム鳴り止まず」と世の中には鎮魂歌が鳴り止まないではないかと、春の陽気に浮かれている人々を戒めるように詠んでいる。

ここから推測をするに稲畑汀子先生が御逝去になられたことは作者の身辺に起こる見るもの聞くものの全てが汀子先生を悼むレクイエムとして聞こえるのである。先生の御逝去を惜しむ気持ち強く「鳴き止まず、鳴り止まず」に表現されているので、その心情が強く読者に伝わってくるのである。(静龍)

レクイエムとは死者の為のミサ曲である。教会での葬儀の様子だろう。亡くなる筈ではない人が亡くなり、未だそれが信じられないという心持ちが見て取れる。空想的な季節がその心持ちを余すところなく伝えていく。(廣太郎)